花散里 拾一

寸二丁 拾二

人またぬほど心ばかりの物おもひしけれはいつまで世
なふことなめまぢどうくおかしきの世はさそさん
わづらひしうおがしこゞなくさとのくわされば
りのんがうく世帯なべていとりしうおりひめくう
ー話ゐさんがな原さとおかりる。麗景殿と申し
ーいふやたちもおはきび院ふく逢ひを語くのち
いよく花なる涙わわけ虫城へめでこれ大将の殿の御
ちつ語るへにもてうくされてすくし語ふ原也し
ほれとうとのこの君うちわくわゆくりのなくうの
めききし語ひしなごり例の御ちつ語なまはさいがのふ
志きもりく語ひびわざともにとりそうし語くぬに

ひとは北山をのこうはまちそて行ふべかめる禅師も
しばのこゝろなくおかしげなる世の所まよはれ
くきさいまはおもひ出たまふふかき志のびがたくて
さみだれの雲のけしきいまだたる雲まふかき山を行ふ
なまばかりのはらうひなくらうちやましてけ前に
なども心ことなくえのびたまへ里の川の辺ど
おりしはなるよりぞ風のなる家の木だちなどよし
ぎめはかよくあるさまの事をにあはまほしきこそ
う義あはきをかぎえくしく御義なれなわれ見て
かくまわてうとちのなる所なればはしさし出て
見いまだたまへば松が枝なるお法の木乃をひうぞよ

まはらのゝ給おかしいそぎてうちたちがらなく
まいりひおりし笑をたゞひとめ見給ひしやどり也と
おぼしいでゝ給ふふたゞならばあと尋ありつ所おぼ
めしくやとはしましけれど涙がちに座にらひ
給だよしもなくてぞはおまてわつろもよほし
参らかなまれば車をしつへきを給て例の
うれしきをいれ給ふ
さちのへわえが思ざまれぬほとゝきはあのうち
らひし宿世のふかう給ありさん殿ゆゑあがし参座の
あの法よしはきて人ぞぬふかくしきさぐくも
きこえるゝ思なわけまばこゝはぼくわたしおどかて

はせうくはんわうの御なかきしきどもはまさ
しておかしめくなる御し
かやうのことゞもあまたあれなとはなおか
はつなさみかどの御むかしをありしなどなげきみまくは
よしくうへしうき孫もとそいはるを人きまぬ心
うりいまさくもはかまふ思ひわさもつしむべき
あとかうしまとりわをおかをばさびかりすきこうそ
な御へしまやうれきふかはなくしの御節こう
らうしげあわしりやときまばおかしいばまはいり
なふとよつきてもはんのゆと御なかうむしを
く御しげなわとし月をへても御縁のやうあり

ころあさゆふのなさけをすくし給ひぬれどもなを
なりはまさに人の物おもひぐさなるべきそかし
かれのとし絶いおもし御わはりもあるく人めなく
さはのふそおはしくさ御心絡むいとはかなく
とおもひたまげ女はれしはうさふくせうしの御
梅壺など読えたまふよ表ふけりわ昔日の
御ぶしいばるかどふいとぞ本だの義うけども
こゞろ知えし深きそちの義たちぢり乳乃のわが御
しくよかひて女院の后ひいにほしまびぬよ
たまどはくきすでよういわれてあてにらうげなわ
世のま逢て花御のある清覚しあるさわしまどむね

ましくなほりしきうくさゆはこねがしすわし物せ
など思ひきこえ給ふにしも昔のこゝちゝなはしく孫
おぼされてくら花のなみ給ふがとくきにはなつかしきの
まやおなじ御にうちなくきしてひまなく侍ると
おがさ侍る猶もえん御わりしいとふかきわてゐなど
しのびやかよふちずし給
たちものゝ在所ほりしこかぜくはゞ花ちる
里をふりてがかふいすしへ忘れがさき柏沢え行へ
尋ねて御ぐさあめはまはかりわ侍ぬ面かめごとよ
御くさうまぎなく月ちうふきこかふが侍げき
おほうへの世にまさがふりのなかむれたる紅葉着

かぐらことをしるし人すくなくなかゆくをまして
いとつまぐくもまぎるゝことなくおぼさるらんと
まことに給ふにやんかいとさうなる世なまど猶とりとき
我とおがしほぐきたるだかしかのあさうるぬをも給
人はたちまちまやおほくのかまぞくひなは
ひきめなくはまふやとはちられれ花ちう
折のほまおふわけまとぞかの給へるもはいひ思せ
人にはいとしとなりわとおがしくるべ尋ふおし
おもてにはわざとなくしのび座うにうちまなしまひ
給ひで乃が我行へるもめぼしきふかくて世り
めなきぬはまなきがつるさもまひはきぬべしはや

うやまひきいれなほりしくうらひ事もおかさぬ
ちとよはゆるさるべしうわかもえ事ほハよしなく
てるまハすかあるもかさるぐくふはるそいふうひ
なし事とおかさるゝハかけまだまやかくげなく
やまも人はなさけをかえしはくすくし事ふなわ
くわうれをはひなしと思ふ人ハとふうくにうち
うハ給まうことりわ此世乃さが思ひなし事
あわはるゝきをもさやうまてあかき給なりまり
たるおゝわなわくわ

△須磨第九　十二冊メ〆　花鳥云以平詞爲巻名源氏廿五歳三月廿余日須磨浦ニ
退居シ給フ明年廿六ノ事ヲ此巻ニ見ヘタリ ミ〆　廿四ノ秋ヲ廿五ノ春トノ事
此巻ト前ノ巻トノ間三年　説源氏除名ノ事モ此写シ此物語ノ筆法ニテ
紕札ケブラレシ事シルサズ　平数四十七

一世中イトワヅラハシク　遠流ニ事ト定ケルニヤ遠國ナトニウツサレヌ先ニトシボシテ自須广ニ下リ
タマヘリ
一セメテ不知白ニテ　遠流ナトナキ先ニト思ニヤ
一カノ須广ハ　花云源氏大将スマノ浦ニイニ居ノ事ハヲモテハ行平ノモシホタレシイニシヘト周公ノ三叔
ノザンニヨリテ東征セシ事ヲセニ用トシテウラニハ菅相公西宮ノ左大臣ノ太宰府ニ左遷セラレ野相公
ノヲキノクニヘナカサレシ例ヲ次キリ又伊周公初ハ播广ニ謫居セシカヒソカニ京ニ帰シトカニヨリテ太宰
府ヘサラニウツハサレ玉ヘリカレコレヲ取合テ物語ニ作ナセリ　栭ノ巻ニ文王ノ子武王ノ弟ト源氏ノ自称セ
ラレシハ周公ニ我身ヲ准シタメルセウコ〆ミヽ　但行平ノ事ヲ本トスカノ人モ自謫タル〆
一昔人シケヽノカニビスシキイシノヱ　秋ニテハ人ワロク思召又遠國ハイカヽト須广ニハ心ヨリタル〆

△世中いとわづらはしくはしたなき事のみまさ
まされば　せめてしらずがほにありへても　これよりまさる
こともやと思しなりぬ　かのすまは　むかしこそ
人のすみかなどもありけれ　今はいと里ばなれ心
すごくて　あまの家だにまれになどきゝ給へど　人
しげくひたゝけたらんすまひはいと本意なかる
べし　さりとて都をとほざからんも　古里おぼつかな
かるべきを　人わるくぞおぼしみだるゝ　よろづの
ことゞも　きしかたゆくすゑおもひつゞけ給ふに
かなしき事いとさまざまなり　うきものと思ひ
すてつる世も　今はとすみはなれなんことをおぼすには

柳ニ円吹ハ先ノ乱ノ事ヲヨミ給ヘ源ノ時出シナケカシツシホス事ヲ思シワミタルナリ

我意ハ行末ニモシラスハテモナシアワレカキリト思ハトカ

カリソメノ行カヒナトソ思ニ今ハ限リノ門出ナリケリ

海面

いと騒がしきことおほかる中にも姫君のおき
くれようへては思ひなげき給へるはまれ心ぐるしう
さは何ゆゑもすぐれて甚なる様りめぐりても
又あひみんことをかれくばとおぼさむめそたのも
一二日の程よりくるはしくおはしつゝふ
おぼはりなき物におぼし女君もかうつゝ思ふ
給へるをいくとせそれ程やはあはれちゆもあらば
あふをかざわにへずまゆかんもさだめなき世に
厭ずてわかるべき事のどそゆもやといふし給ふおぼえ
給へばまたひてもけ給ともにかやとおもし給ふあるわ
あまどさる心ぼそかりし海づらの波風よりほかに

たちまじふ人もなかりけんよりくらうさう御はま
まそひまぐし給へらんもいとつきなくわかんゆるも
中く物思ひのはまなるべき様などおかしうへを
様女君いいしようんさかもなくれきこえさぶか
あそびゆるおもむくそうるめしげによがいたわすれ
海ちる里のものおりしいふらつあり暮なきん
おそくは里遠なる浜はわ浜まとこれはけよかく
まそもみし給へいおかしおげきさる浪もいかに
あとりわなわ物ざわまそとほれよふえたそまはわ
かよひ給ひし雨ぐ人まきぬんをくさき給ふ人が
おかうわく所へ忘れ宮よわも物のやうやみいまし

花散里源氏出ヲ送ル使トシ

文ノクルマ人ナクヨニシ思ナラ

西宮左大臣安和二
三月廿六太宰府ニ
左遷シ

とりなさまんと我御ためつゝましけれど忍び
つゝ御とふらひつねにありむかしかやうにあひ
おぼしあはれをも見せ給はましかばとうち思ひ出
給ふにさもさまざまに心をのみつくすべかりける人の
御契りかなとつらく思ひきこえ給ふ三月廿日あまり
のほどになんみやこをはなれ給ひける人にいつ
としもしらせ給はずたゞいとちかうつかうまつり

七八人 惟光 良清
右近丞人姓不知

なれたるかぎり七八人ばかりにていとかすかに
いで立給ふさるべき所々に御文ばかりうち
しのび給ひしにもあはれとしのばる許つくい給へ
るは見所もありぬべかりしかどそのおりの

栄花物語ニ帥内
大臣ガ北ノ方ノ
アヤシノアシロ車
ニテトノニカヘリ
給ヒヌ

心ちのまぎれにはかばかしうもきこえずなりにけり
二三日かねて夜にかくれておほいとのに
わたり給へるあじろ車のうちやつれたるにて女
車やうにてかくろへいり給ふもいとあはれに夢と
のみ見ゆ御かたいとさびしげにうちあれたる心ち
して若君の御めのとゞもむかしさぶらひし
人の中にまかでちらぬかぎりかくわたり給へるを
めづらしがりきこえてまうのぼりつどひてみたてま
つるにつけてもことにものゝふかゝらぬわかき人々
さへ世のつねなさ思ひしられて涙にくれたりわか
君いとうつくしうてされはしりおはしたりひさ

河云腰ヲノハスルハ官仕ノ礼也今ニミヨノフルト云ハ休退ノ心ナリトゾ 此説アヤマリカ
花云蟄居ハ冬虫ノアナニコモルヲ云 致仕ノ表ヲ上テ閑居シナカラ外行人ノキコヘヲハヾカル也 歟

しき程に志ぬようはもなきとて頭ひぢますへ給
へ侍ど、くしまゐらせげなれば、ことなくこもりて
給て、めいし給へつかうまつらず、くらゐをもかへし給へて侍る
らんやとなまとゝ侍らぬ着物も成りわかきこえ
さきん思給ふまじき身のひたもきさまよわおほ
なけれもはかうまはらびくろゐなきものへしなそ
まはりて侍るに、わりなうまゆはゞこしのべてなんど
ものゝきこえひがひがしう侍るべけれど、世中
はゞかるべき身にも侍らねど、いちはやき世のいと
おそろしう侍るなり。かゝる御ことをみたまふるにつけて
命ながきは心うく思ひ給へらるゝ

花云ウツホ物語云天ノトシサカサマニナストモカヘルノハアラシト思ヘトミヽ 日本紀云神功皇后三韓ヲ征シ給フ新羅王ノチカヒノ詞ニ東ノ日更ニ西ヨリ出阿礼那礼川ノサカサマニナカレ川石上リテ星トナラシカキリハミツキモノヲ退轉セシトイヘルコトアリ アレナレ川ハミヲキノ国ニアル川ナリトミヽ

世のすゑにも侍るかな。あめのしたをさかさまになしても
思ひ給へよらざりし御ありさまをみたまふれば
よろづいとあぢきなくなんときこえていたう
しほたれ給ふ。君、とあることもかゝることもさきの世の
むくひにこそ侍なれば、いひもてゆけばたゞみづから
のおこたりになん侍る。さしてかく官爵をとられ
ず、あさはかなることにかゝづらひてだに、おほやけの
かしこまりなる人の、うつしざまにて世中
にありふるはとがおもきわざに、ひとの国にもさ侍
なるを、とをくはなちつかはすべきさだめなども
侍るなるは、さまことなるつみにあたる

官爵除名ハ光君ヨリコノ方ノ官位ノ除名シテ無位ノ人ニナスヲ云也 無文ニナヲシト来ニ見エタリ 除名シテ流罪ナキ人モアリ 罪重ニヨリ源氏ハ左遷ノ儀ヲ云 源ノ説ハ位ヲ取上ラルヽホトノコトニテハナキトシ
源説ツミニナキニ任テ京ニシテハ卿ヲ遠流ニモ処ラルハサモコトニ大殿ハ思トミ

侍なるにこそあはれなるをんなりまうをてつきせなくすくし
侍らんもいとたえずうれしくこそまさりてわがおもほえ侍る
りけり乃ずまぬさきに世をのがれなんと思ひしも
かくたちぬるなどこそ侍らめよきこえ給むかし乃院
物語院の御事おもひける乃給ひをしはしんけんへなと
やみ出給ひて院奈をしの袖もえ引なかちぬねに
君もえんはよくよそもそなし給りしは御君乃なよ
おく給ふくまの記述あはきそあまうまいなまきこえ
始識いふしとおかしたかき侍りし人ぞ世にけり思ふ
なまへ日は世なくのとものなしひ侍まいらせ
こみ此はことになんりし侍る世なるるましよおはりの

左る源ッ父タル御罪ノ人モ此式ナキモアリけり

サレトーー此ノ事ナキ先ニ立サルハ人ニ……共……

座うり思ひあけき侍まりしよくさらにかくて
かくの事夢をみと哉りけると思ふかくへかくはあ
侍ふおさなく物し給ひをかくよりし哉める中に
まゐまはれ給ひてありさま哉こえぬ月日やへたく里給
りんと思ひ給ふ事をなん心の此事よりもの所
しう侍るいみじくの人もまことにおほしきて
しもかく事すはあさらさわくわ給さ事へ参まて
人此えかどふもかく事たくひおかう侍きかされど
いひ出るふしあはてしうさ事すも侍はまさとさ事
あうさ事よ思ねありよるむうさなくなんなどおかく
此源物語哉こえ給三位中将もまいりあひ給ておか

イヘハエニ添ノヤカナ
シキ呉竹ノ称也
ヤタレトラヘモナキ

そなたにむかひて給へり、琴かきならせば、とまりなりて、
人々御おまへにもさぶらひて横笛などせさせ給人
よりはこよなうこのひゞきは中納言の御笛にて
えふかれしう思へなさるを人しれずおもほえ給へは
人なみならずさまかめるにとりわきてくらひ給ひよ
まいとまいり給へるなるべし此のわたり琴をなん出
給ふなる月の光とおもしろき花の木どもやうやう
さうり立てもはかなう木陰のはなおもしろく庭よ
うすく霞わたりたるうちこぼるとなく霞をはひて
秋の夜の月にまさりおかしくたちまさりすさまじ
おもうらんよそしうてよけりなかめ給、中納言の

しみてまはわさくらんとよやほどよりわきて
ゐたりまうるいめんおもむきをうちもてはやさ
かゝるけはひうこの世をさりておほつかなくもあはぬ
べうおほし月ばをさしもいうぞて海よなどの
所へばもやすえむなくわか君の御めのとさい
しやうの君して宮の侍まへよりせうとやすし
給へつるかほりも聞えまほしきをかくては
みなわんぢたぐひ侍る程はいと夜ふかう出させ
給なるも侍まふわか御んけしき侍ぶかれん
ぐるし若人のいきさしなき程はきこしもやすらすき
所までと聞え所へまかりうちなき給て

文選江文通別賦云黯然銷魂者唯別而已

逢坂山もえしらぬわかものゝやとはまの塩
やくうらみまづゆく清の人しともなくうちすんじ
給て暁乃おきうりのこやいんはくしなる思ひまさり
給へる人もあらむりしとの妙へいはとなくおと
いふもしらうるて侍るなる中にも形けさいは
たくひあるまじう思ひ給へらるゝなとうれとなる
あなまそへなまめきうるしいれもへちやうさをまかし
まさりもあしく思ふ事なりてむをほりて
侍る程をしまうる世たまへいぎりなき人いらたな
へんまで清きても中にくうき世乃さまか思ひ
給へしまさぬへくれいん清まう思ふたまへなして

仏子ハ二寸鬼狼尾ラソヒ人ノ子ムリカナシムト云リ

人ノ方ヘミヲヤリツルニモ見レニテアレハ又三テシヨミテモシスルモノ〈〉ルルニ大文ヨリ手ナキル為也ドコ源ノ島ヘ山ノ手ルモシ氏ナノテトアルニテニコトヤルセシト云詞入タリ

いふかひなくて給ふとききえ給ひ給ふなとを人ゝのう
きそえたてまつるへうさの月いとおかしきにいとゞ
あはれめりしうこさましゆそ袖を相ひたるはまとふ
おほかたのさまなれぬ雨しまてもなけあくおほ
きしほとまわみそてまはわかうめてし人となきまた
ぬとしへなまよ清うわ給ふま残いとしと思ふ成ことや
うれ清うへし
なきゝ人れわのまやいかゝへたらん嬉しとあわ
し雲井なるてはとわうへて君乃もはまなき侭出
給ぬ事忍ぶおゆしまちて年義あへるとのにおり
まれハわの清うこの人にもまと給まさわたる風

サムライ殿上
墨盟日所ニ
テ免モシワリシ
キテ中ニ座
ハ二葉ノ所務ノ
核所ししを所ニ
ツメケル人ゝ

まそ所にすむ道斗てあさましとのこ世を思へる
人しおなわは行ふへひまはちさしうはかすまうふ
かまわハ侍ともにまいらへきんまうけしてわさ
くの别おしむへとまやん人めをなしさうぬ人を
とふらひまいらせも年も送とつめほわかつりしお
すつ海さま道ハ所をを法とのしる車のこともなく
さひしおすり世ハうき物なりとおもひしりて法
たいりんなをうもうさへはちわたらてたみ所ゝ
見義の庵したわかるなとたるかろわましていつかふ
わまさゆうんと都得世あの多いりわらわ侍へまは
思かうしもまいつてなのめにほりし私今東にいこ

あとかまへ浅ましりん所くすみてゆま松秋
さりくとのぬすうさともおりうて出いふをみゆ
ゆをん伊勢年月へはかなふ人ゝもえしもき
えてぞやゆきちらむなとさしもあふましきすさへ
はめのくとまかきわよ庵ふしくしそ秋小花
ますいなん例も思ひなふさ海よやおかりあし
はるかくて侍なとたはめの道はとおりふをかく
世をすみふくきハ小はあくるるきうのその
はろうあかうわきるとひさやこりわみてやいつま
あまみ世に人もなきけなき物と心をうき道をてんも
いとおしうてなんと歳こえ竹へもかゝふ世をすつる

よわかは思ひなき事はなかりけり御かとゝいはれの
おそいとしとおもひ入たるさま人よりことなる世
ことりわすめしちゝことはいかにしなりまそへをと
もておもひつまゝかくなにまして世のおぼえをわすれ
りしわてなをとゞまきてこえおりにたとふへひよ
きふりすわおとあれ人のおほるしんあとももえし
く中くく志つゝ遠ふそてまはらて居ゝなまし哉まゝ母
のみれうさなとのおんかなわしさいえいのおは
たぐし義はなゆししや思ふ人かさくよつきて
まよの近おく人のあとのおのなるをさ給たまわわて
もわきておりかもいろえしうらうけまへおまよわも

イカナラムイハホノ中ニスマハカハ世ノウキコトノキコエコザラン

おてをとつまきさえおりもとゝ又かれりしよ人もなく
うらおもはまい遠なる清けわき所なる御世よゆ給され
かきうて年月をへは君つれ中すりもむりん
うえきはちん人めをはひときてのいかにもはおなかふ
へ者なおおかやきふりこまわやゆるひとてお恭
らかあうる日の影をふみまとてられらうふ方をみる
まふすもいかはかんをもかんなわおやまちなけれ
なさか給へ事にうかゝ給事もあめまと思ふす
まして思ふ人くれふて例なますなかるおひらさをも
せきよ物するをしき世すてなちまさるとも心わ
なんなとやなきおもて世おり日たゝ給まいておかとのこと

無紋　門云平緒
直衣ハ武ハ縮
雖非凶服哉絶
宿老ノ公御ず
どハ常ニ着之

まわ御言三位中将なとおりしつかぬいめんし
給りんとて御ふ御しなとたてまつり給ふ位なき人は
とそむもんのはかま中くいとおはうしき
着給ぞうちやはま絡へ給ひとめてうし御ぶん
うきさ給ふとて若座うだいりよりわたまへ参るおも
やき給へ給ひけ乃かまたうろいとあそりきよう
なまいこまなうころなと給へにけは逝けのげ乃やう
まや座きそ給る巻なは代わきられとのかまへは女君
殿を人わうきて、なとせ所へ給ひと思ひかさし
弟いようくてさすらへぬとも来うあたわさらぬ
後乃うけいよふかわしときこえ所へな

おまそもげさまとまうす御なりは後をみそも
なくはめてましいふともなくてりしらかくまに
升りくまそ殿とまき紀雅り給へ給さ成祈らしら
なるなのよたぐひなかわくらかしおがしき宮く
人民はいわきなわかんさこそ河内なる清輔後まえ
給てく院の雅子なへつき給ぬ花ちる里のんかうがは
おがりてつきに聞こえ給もおとりわまそうれ人も
いまたびらはいはゆうしと座思ひもむおがきは
それ表はいまゝ出給物うらいともみうくそいさう
ぬりしておはしたまで女御うくがきとまへ給て吉
よろ勢念まへ給ゝとよ後こひ聞こえ給ざ成りなお

はかなきこともはさしいといひしうんほうき義はわか
はまたひこれはすけよのしまでせぐひ給へば年
月いみじくめでたきさうむ猶おはし座りまで座の内
いとはやうなわ月おぼろおぼろいそ泥ひ給く
山のふかきわたりんほうなくまえゆるかもすゝなふ
またいむ君かのなみたほしやくはましなれば
あらしもわたわたなりけりやとうちくはしてあは
ーくはにはきなうんたる月よけのあはめしう
志め座のなはふう池小風まひまゝ人ふかひふる
もれなくていと悲座のよいわ給へいずうしのさわ
いそく座のて月をみてあはまたあてかは物語の

無擧 日本紀ニ 君スニデノホドモフルヲノ 庇ニハアフフナシノ 草ナソシヒケル トコヌノチルシダニミバ コトナシ云過ル月 日モミニザカリナケ

細云 毎夜月ノ入方ニ我方行末ヲ思ヒトナリ 花鳥ニ中納言ニ別ノートアルイカヾ

アヒニアヒテ物思ヒハ我袖ニ宿ル月サヘヌルヽガホナル
正直ニテ妙ノ一字トシ袖セバキハヒゲノ詞

猶よ助のうちちうう来にくわさしりよれなとやうは
うわの御いめんもえいえしと座と思ひうしとなし
めぞすくしける年はもくやしうきうさゆく
さきの方あしにあわぬへまよ男まそなると若くん乃
とまは世なくあうわわけまさしかさのすども
の程て君もえはしくなけたちよはくうそいうぎ
此姥まてれ月の入えはるわともうへられて君なわ
女君のこ義はすようはまてけよぬはくかかなはま六
月うけの座とま葉袖いをりくとも見えても
えりやあのぬひのわをいうしゆうおぼいさはかん
くるしくれいのはも年くさあきてこえ給

りめぐりわつ井よも世へつき月うけのをり
くもらん空なるなのめなるにもへはまりなしやまぶ
さへぬ鶯乃こゑうらみをくりこのたまさかなどの折て、
わきくれれやどより出給ぬよろ川乃する北したゝめ
さをきを給ぬ山しらはうらまにはわ世に家びりぬかざわ
の人しくとのうすとわなとなふべき事かなしも
さくめをうを絵にともふさうひ中ゆるかまわい
まふえわおたまへまり北山里の御にこのれをは
えさるにとわけのひ給べるもとふさうよう ひ
もなくうちそまろこさ家べるもふくども文集など
いまだたまうこさそは始りひと川捨もさを給ふ心をまき

はでうと花座の家はちうひなどさうりぐ給
りましあやし北山のほめきてもそあし給さ婦うふ
人こまわりしめよ鴨川のさとみえ飛よし乃ぬいり
きこえわさし給わまやうし給みしやうりみえまの記
よわむしめてさ家べ事とこ給くの勢なとどみえ家
たそまはわまゐ給それよわおのみえくうまちおさ花
とのなどいふこともまでか納言とりのくしよ給
りみまふたまへもはまさし春家司ともぐて
しきしめにべき御はまどもの給ひあはをまうら御
うその中務けぬなと座ゆる人こまなきにはまて
なかなうえふてまうすら雅こゆ年ぐさうめはまたなる

うきにはきそかと思へどもゝはかてこの世ありて
かへさふやうもあらんなといはんと思ひし人もこそあ
さふらふへとの給ひてこのたびもなまうのぼる
世をそむき候へまし物ともきこえくくりをもすゝふやす
君は御めのとすちちうちを候里なとにもおもほしさ
さ候のいさ候ものゝそてまぬあくしきすぢにおもひ
よらぬ事なし閨待のみのはかりとなくはかなく
しも哉こえ給ふとも世をそむくもしかりなる思ひ給へ
なからひかせ世をおりひ給はるをもれうさも侍ら
さもたくひなき事まてあり侍けれ
あふせなくなみさの河よ志慮しやなりはく

見かのりしめ哉侍らんと思ひ給へいは侍るのくなんはまん
のがまさうさう侍りし本性の程ともおほうけまいに候
おふはきこえ給りしはいひいとうおもてしはて
まよひ給へ出仕まはうはまほも不あそうなん
なかんる候うるふみ見ゑせも消ぬ庭しなりますそ
侍の瀬を見をさもこえてなくみる道のきを給へ候は
ていとおりしけなりわれまいにさひ免いめんなくて
やとおもひいなき哉くちをりけまとれ朝りくしせ
うしとおもいなはゆうわれかうておもひ給けなるべく
思ひ給へるもいふは何なりちらもやすく給りしはるはわかぬあれは
とそ乃昔ふは院の法とそおもひすてまほしわ給へとぞ

小山 是念ノ天暦ノ陵
岩カゲト云所ニアリ 松崎ノ奥ノ名所也

栄花物語云 伊周公夜半計ニイミジウシノビテ月ノアキノアキラカナルニ人二三人計ニテ出サセタマヒテ古ハタノ院ハカヘ参給

きぶ山へまうでて暁にかけて月出るほどなりければ
の道のみやにまうでて給ちるきみたちのまへにまかりて
まいりて清水はうちおえさうを給ふ春宮の清すを
いもしくらしるめたまふ物に思ひやうて給りさみり
んふうおぼろの清物語りしよろの外然まさらわんん
うしなりしうめで善御はけりひ乃せうしに
かりしぬよつゝうかしは心づくへもうためおぼえ
ちを海刀しけまづことさらにうさてとおぼさるべし
わざ御あそびに中くいまひとゝいみてまつ
まさるをぬべうれおぼえんしうへしてたぐうくわひ
けぬほえよほたわはなぶもおりふたまへおはしける

アルハナクナキハ数ソフ世中ニアハレイヅレノ日マデナゲカム 小町

事乃一かりよなん空おり給しう侍るおしけ
あまりはなきさにおもしても寺の清世ふたまことをく
おほしまさづと乃とやおを給ひ出でとりわかなほや寺も
ありおわりしまうまうてまうしわまきむ清ん乃くらうご
たぞえ庭わ給りて大将よ給ひ乃事うおおほ
北おりしはべりてなれ給ひへ御なりおいとつまむきば
あ海めきさふわ清山りまいり侍ふ御ことはぐく
やと殿とえ給ふとえんに物もきこえ給りてまわるく
しあらひ給清をしまなわ
見し人はなくあるはかなしき世のはてを
きしうひもなくくやしきむ清んまとひ

どもにたはしありむるうやもえかはけさせ
たまひぬ、
おもしろからしきことはなほすしをまうさせし
世のうさはまさまさる月まちいでていそたまふは
ともよたびた六人ちかひしも心もむつましき
おほやけしても帰むまでうおはひるさうなはあと
なま道ときし世のわかおなりことなきわらん成いと
おなしう思ふ中にうれみうきの日うわりの見は
いまんありてはかうまつりし君の物かう此老人
うつほあうふわも独はなれるをつまりえすぐけ
はまぞはつはもとうまでりしたなかま道はともに

まいはうたかわうもの志ものゝ御申かもまで水か
見わろもおもふとむりひ出てまでわれてわかんる
のくちをとは、
花義てまで嫁りさししうれかのんを思へはは
しうものみつのきさといふをいうのに思ふらん
ひとよりわろなの中わしも此なとわかはをも
ふぐるしき君もはるちわかはて侍御しかれうさ
おもの見物とて神はゆのわやし志なふ
うき世をいのまうつりの後くとくまうぬ名たを
たかすの鍵にまうをて水の路ふさ後鴨めてすな
まかゝき人まて男めりそてめりのてうしと見えて

まはる御山にまうでゝおはしましゝ御ありさま
たゞめの前のやうにおぼしいでらる。かぎりなきにても
世になくなりぬる人ぞいはむかたなくくちをしき
わざなりける。よろづの事をなくなく申しても
そのことわりをあらはにうけたまはりたまはねば
さばかりおぼしのたまはせしさまざまの御ゆいごんは
いづちかきえうせにけんといふかひなし。御はかは
みちの草しげくなりてわけいりたまふほどいとゞ露けきに
月も雲がくれて森のこだちこぶかく心すごし
かへり出でむかたもなき心ちしてをがみたまふにありし
御面影さやかにみえたまへるそぞろさむきほどなり

なきかげやいかゞみるらんよそへつゝながむる
月も雲がくれぬる　明けはつるほどにかへりたまひて春宮にも
御せうそこきこえたまふ。王命婦を御かはりにてさぶらはせ
たまへば、そのつぼねにとて、けふなむ都はなれ侍る。
又まゐり侍らずなりぬるなむあまたのうれへにまさりて
思ふたまへられ侍る。よろづをしはかりてけいしたまへ
いつかまた春の都の花を見んときうしなへる
山がつにして　桜のちりすぎたる枝につけたまへり
かくなんと御覧ぜさすれば、をさなき御心ちにも
まめだちておはします。御かへりいかゞものし侍らん

かゝけいは道に志りみぬさまなるひし参りあるを、
よるくはましてうきめをいとあしきの給りしをかれ、
それの御かへりをはりまろりみえそまつるに、
おち来なまろりみなくんをくるきたまひしもり
のちとおわくの清はりさるあ思ひはぐけられぬよし
物ありひなくてわ道も人もすぐひ給はべるわきる
世をんとおかしあげ来りるをとくやしう我あり給
ひとりりうくん事のやうあず物同ゆ須御
なわいさるあきてえんさをやわ侍る給おまへ申き
きいし侍ぬんほうけはおかしめしたる御気色を
いみえしうなんとうくこまるとなくあるる給乃みぐまじ

くあるなき庵し、
さきてとくちるはうけれども春は花の露を
うちかへりみえよときりしわくるときこえて名おも
苦あるわかりわきしつゝひと言のうち思ひてなき
おへるに人めもみえあそまほまきあ人いよくおかしくぼ
遂ぬふはりわさ庵をあげさかしみ我さえぬ人
あしましてつゝみまいわなま道たましもまつわをよび
たまふましきおさあえるはやうなをどまでもこのか
うるよはおへりみえれきるさなるはる我志りしすてを
みえたそまほらぬ雅やへんとおりひあげさたわおか
きるの世のひとも流よおは絶しく思ひ我とえん、

なさけありける所に嬉しきみかとの清まへに
御ひとつかひそ哉りしなりなりぬいふ
かはりはこれは清いさりけむうぬ人なく清
とくとよ侍こたぬやいかなし心むことを義うん
なちめ世なりける中にも御門かはされまはしては
もはしは思ひらぬものはあらぬ御とさしはかなわては
いちりや浅世の思ひとかうはてまいかよ所もあはし世
ゆはわておしき浅くえらはおかやを中そまし
うら見せそまほまつとも思ひそとかひましけむ
ゆもなまのかひかへとありかまやかゝるおほかた人
いふくうらめしき人おほく世中はあはれなき物

一 かくきのくよ終ほとりは清涼そおほしは日は女房よ
清物語のとりは浅くえくらし給て例の御ぬ
おほく出給うわの御製なとよひの清きうかひいとく
やはし給て内出りなかなる世中すらいそく
めくさりをとらわ所へうしいつみ浅き思へ参りぬ
おほくはかわぬやわとおほせんすらん一日二日
ふまのほのよへとつるおわからあやしういふ
んちはる物をとてみもとまし給てりよいさ事ひ
やすくたまへて女房ならは浅たまへるためとひて
御さかりそ所へる月まけいうしおりしけまて
昇所へまわりあなくてなんなまし世をわのまたなき

生別トシテ死別モ上思タルトヘ

いかなる時まりさすらへ給ひけんとうちながめつゝ
かなしけれとおもひわたるかいのちのへ
けれは、
いかなる世のまつりことをしるして故郷へいのち
を人にかさねわかるゝなれはなとあさましかりし
きこし召しかへは、

百年ハ生ヌモノナド

わしろぬ京よりつてめのまへ乃けの道戎
あはれめでしかれけるさうおぼさるらんめる
いとみえてうけまとあけそなはりしたなまる
へ寄によりいつまいて行ひぬをすゝる西翁にはと
をひてむまもかきうわかたつる行ふまいり乃わ行ぬ

大江トノ參宮ノ時ノ旅籠ハソレニ於テ松トシ
次ニ一代ノ一十七バニアイセヨリ大和路ヲヘテツシノニ難波
ニテ旅籠ヲニテ七日ニ大江ノ旅所ニ着十日ニ入京トシ
昔ハ驛樓アリ
樓ノキシ氏云リ
大江ノアレタルヲミテ
ヨメル 屈原カ一
思ヲモテヤ旅ノ
人ヨリモウキス
ヰヤヒトトシ

日なかばなるほどは、いとひさしさへそひてまさるさきのれ
時なかりより北海小はまなり給ぬかけうあの道にても
かゝる旅をおもひ給りぬるんちかくほけ侍りもおはし
ふもめほくうなわかわれ蚤といひはる雨をいふ
あまて松かかわ持ちてしなかわきる
かの国は名をも残し、旅人ともゆく道を
まぬ家ぬをやきんおぼさにも波のうけかへるを
兄おてうきやましくもとう故を嘆しおへるさ夜
さる世の山ふことなきとも忘つゝしくきてなきされ
かなしとのこ侍ともれ人く思へるうちおへわみ給
へるようしかさの山の、跡をありまそしまことふるさ手

イトゞシク故郷ノ
恋シキニウラ山シクモ
カヘル浪カナ

古今
山カクス春ノカスミゾ
ウラメシキイヅクノ都ノ
サカヒナルラン

三千里外隨行李十九年間
任轉蓬
在昌賦蘇武

須广へハ十余里

里乃かのんちはなるよりひ比志川くもさんかくさし
小原里をゝしま乃霞はへだてつゝまことなかむる所も
あかし雲ゐのかはうるぬものゝおくなんおはすべき
所はゆきひらの中納言のもしほたれつゝ侘ける家居
ちかきわたりなり海つらはやゝいりて哀にすご
げなる山中なり垣乃さまよりはじめてめづら
かに見給ふかやのやどもあしふける廊めくや
などおかしうしつらひなしたり所につけたる御
すまゐやうかはりてかゝるおりならずはおかしう
もありなましと昔乃御心すさびおぼし出らる
ちかき所ゝ乃御さうのつかさめしてさるべき事

どもなどよしきよ朝臣なとしたしきけいしにて
おほせをこなふもあはれ也時乃まにいとみところありて
しなさせ給ふ水ふかうやりなしうへ木どもなどして
いまはとしづまり給ふ心ちうつゝならず国のかみもした
しきとのへ人なれば忍びて心よせつかうまつる
かゝる旅所ともなく人さはがしけれどもはか
ばかしくものをもの給ひあはすべき人しなければ
しらぬ国乃心ちしていとうもれいたくいかで年
月をすぐさましとおぼしやらるやうやう
しづまりゆくになが雨のころになりて京乃ことも
おぼし出らるゝに恋しき人おほく女君乃なげ

花云紫ノ上ヘハ一字ノ
抄[illegible]ヘアルベキ
但紫ノ上ノモレハ[illegible]
見タリ
細云式アガ[illegible]モラシ
タルカ[illegible]但紫ノハ
ツキス[illegible]
中ニハト式アガ手モ
ラシタル成ヘシ

細云永雨[illegible]
思ヤルヘシトアリ
花云ト二ヤモイカヾ
ラントス云ハツイデ[illegible]
ル[illegible]アニリメダ
く[illegible]

君コフル[illegible]
けりノミギハニ[illegible]
思ベラし
ミギハハ[illegible]

たりしさま春宮の御事わか君乃なに心もなく
まぎれ給ひしなどをはじめこゝかしこ思ひやり
きこえ給ふ京へ人出したて給ふ二条院へたてまつれ
給ふと入道乃宮とのはかきもやり給はずくらされ
給へりみやには
松しまのあまのとまやもいかならむすまの
浦人志ほたるゝころいつと侍らぬなかにもきし
かたゆくさきかきくらしみぎはまさりてなん内侍
乃かみの君にもれいの中納言の君乃わたくし
事乃やうにて中にさなるにつれゞとすぎ
にしかたの思ひ給へいでらるゝにつけても

白河ノ上[illegible]
コリズニ浦ノミルメハ
カラントリ思ヘ

こりずまの浦のみるめもゆかしきを志ほやく
あまやいかゞおもはんさまゞかきつくし給ふこと
乃は思ひやるべし大とのにも宰相のめのとにも
つかうまつるべき事などもかきつかはす京には
この御文ところゞに見給ひつゝみだれ
給ふ人々のみおほかり二条院乃君はそのまゝにお
きもあがり給はずつきせぬさまにおぼしこがるれは
さぶらふ人々もこしらへわびつゝ心細う思ひあ
へりもてならし給ひし御てうどもひきならし
し給ひし御ことぬぎすて給へる御ぞのにほひ
などにつけても今はと世になからむ人のやうに

のこおぼしつゞけばえゆゝしうてか納言は
僧都よ御いのりのすなど奉りしにみを
はりなど物させ給ふはいとゞむげに帰りん
志はめ給て思ふ事世にあるをたてまつり給へとん
くるしきまゝにいのりの中給ふひの事との物など
せうしてふそまはりわたるまふりとりの流るなさし
ぬ義はまうりわたるんちすゑもいとゞ寄にさるぬ
暁との所し面うけれどおもかたにそひ所へるもうひ
なし出いわ所ひしうさすわ井給しまき柱
あとをとみ給ふもむすめのことふさうわてすのをとむあす
思ひめぐらし世よ志前しみめぐらひの人ぶふ

ながまして なまむつひきこえちゝはゝかもなわて
あかしそそなたりしたまへまだよはうふひまりの
まて恋しう思ひきこえ給へるあとりわかわかさ
する世よなく嘆なんいいとむりさなくてやうく
まへる道草もあひやすらんきくなどれ絶けまど
いはまでとかぎわあはれまりまゆもありてぞおぼは
につおきびなん六条乃宮よも玄宮の清うにわ
あかしあけまさ夜いとさうあわはすくさ乃ためな
物ずすまはいつのかさくいかほさまん年ぶ給も
たゞ猶乃きこえなどの時ましさにすうしなさけ
あはれしおかんをばそれりはきて人民わかぬ出る

古今 コフレモアフヨノナキハワスレナマ恋路ニナヘロヲイシゲルラン
別テハイツアヒミントオモフラン限アル世ノ命トモナシ 伊勢

すもうとのゝひとへ入りおかしきのひつゝ業
みもおほう御返しもすこしすくゝきこゆりもて
あはれしかうかうわようき世乃ひとことなまど
うけても心かさゆはいひ出るすなくて座ゝぬる
いかの人氏はんむ巻もはなう絶なりし心のひく
うるふまうをはり川いめやすくもそかくしはる
ぶりしと先入り悪しうもいうしおかし出ざらん
使かへわもたうしおま座ゝすそこの後はいかゞ
塩たるゝことをやくにて松島にとしふるあまは
もなげきをぞつむかんの君の御返りには
うらにたくあまさへつゝむ恋なればくゆる

けふりよりしどろなさゝなほすともはえなん
さだうわいはてゝのちそ中納言の君は清盛乃なすのふ
きおかりしあげくさ度なをいふしくひたわ君ゆる
思ひ歳らん給ふしくもあまばうちあけりま返給ゆ
姫君は清ふゝいんむをまこ度座の南まし清のへま
なまでは清を難なる事知得くて
浦人の志ほくむ袖りくらへみよなみちへた
つる夜の衣を物乃いろし給へ係ゞ度など
いときよらなわ何ごともらうらうしうものし給
ふ思ふさまにていまはことゝに心あはたゞしう
ゆきゝうはらふ方もなくしめやかにてあるべき物

門云聖廟宰府ニ下ノ後不断ニ精進ニテ朝夕法花経テンドクシタマフトゾ

ぞとおぼしめされしうくちおしうぞおもひに面影
ありおはしてさへかゝる思出きたまへば猶思ひ
てやむらへましとあかしまへうちちへなさや
かくうき世ありけれどもおもひしなりんとおぼしければ
あかで御志やうじんゆへ何をくれなきにあひてだに
いはんとのゝくわの君の御うなどあはれもいと
かなしけまゐらせのほうあひえてんさみれりしな
人は物しかしいうしなめうあるけとおもひ
なき事は中くそのまゝといまゐりなしや
あらんまことやさはしかなりし程のまきたにあり
しそのねの伊勢乃宮へもはちのひあはれ〳〵なき

さらもかはりへさらにまいりまゐらせらぬ事せ
うきねへまゐらせ給ふてつゝひなどいふ人よわきと
にあはめうしういてまゐらふかうみえたわな哉すつく
とはおりひたまへられぬはゝまぬ哉うけ給へなも
涌ぬ哀れんまとひかとなんさわとも年月を
へさそ給りし心ら思は庭わきこしさしけるかもばかん
ふうむ身のこまうまゐらせえさきん事をり御う
なるべけまい
うきめかなふいきをのはまと思ひ庭連とし
たるさふ庭のうらまそよ侍りおもひたまへ
えさ御し世のはわき庭も哉いうまなわり侍へをまふ

かきおくる文句

伊勢物語やしなひのかゝみにおさめてもいふゑひ

なまえ給ふなるわきまへとおもひ給ふまゝに

うち見きくうまへる志給ふうしのかゝみにあ

まいもうわざまにはゞきてすてつるよしと見ゆるわざ

先よりひきゝえし人をひとへしらしと思ひ

きゝえし心あやまちなきにかれこそやせあも思ひうむ

じてわの道ぞかしと物語をばいひよいとおしう

うるしけるよぶ物あり思ひきゝえぬわうしのは

かくいふやうはゞ道なまばはゝのひさんへむほまうて

二三日すへはきぬてのしきの物語などさせて

きこしめしはわの座をよみしまおはさぬるひの人ぞ

ふわかくはまれなほすはぬなまばかやうの人も

なのはゞうう物とをうけてかれみたてまつりほはさぬ

うるちをいひじうめてふしと流にとなわくもはゞ

世のきさやうの家田ひ座るべしかく世とするはつまる

男とおもひたまへまじうはおぼしくいはるさひやまと

まし物をわどなんはまくにあるまうぼうおまくよ

いせ人れ波乃うへくくを無ふきめまう

てのこまとめを、

はまりはむなけさの中よ志ふかれていつまで

はま乃爾となりめんきこえさせんすのいはとも

風俗伊勢人
イセ人ハアヤシキモノヲ
ナゾトイヘバ母ニテ
候ノウヘコソ

侍りぬこそはおきぬへちし侍まてなとかはわくらむ
うれやうにいはこまもおかはのなりしはやかなりし
給ひなちる里もかはし物されたりきるまてより参
おは見給へ御消んくみ給ふよおのしさもめ参らせ
ぬへちしていはまてもうちみはなくはあ給へと遊
思ひれもちりしくさかめわ、
わきまさる折の志のふ袖なれ見はかしけく
も露のかゝる袖られ物るわかをとげよもらるわ
かのうし給みも笑はまゆそれりはらんとおほし
屋わてなの面りし母ちあくく津まそなどきて給
へば京のけいしの待に伝はりしてちうき園との

御葬のもみなどもよおかはせてつかうまつるへき
よしの給ひりんの君かい人まろへありいひしう
おかしきほれおふくをおもいとうかしう志給君
ふそをちみりみやかもう給ゆあ様うし給はまた
かぎわあはは女御こやも所ゆもおはきはおかや老
さ後のみやはゝ人とおほし方きわまるみふく
あまりゆへもうゆのめし我こともいでうしかゆは
されみてまいわ給へ奉りつきても我んよ志み
めしうしかはまれしよおほ給く候七月ふあわて
後いわ給ひしうわしは物りひのなこわなまは
人みそもまも志給しめさまさまみのうへよはと

さかりを過ぐしてこそ御門にうつみはべるはあはれなり
ちぎりを過し御さまかたちもいとなまめかしうおは
よろしなまいと思ひ出るよりめくあはれなる心のうち我
うるしけなまはあそびのつ手でまそみ人ならぬ
あないとさうぐしけまいりのふましてさおもふ人
おかうむかうよりもひかりわたまんちするの御と
の御はり院のおぼし給わり御んをたがへ
はるかなはとうらんがしとて深く思せ給りえらん
し給りまじ世中あつかはにはきてもあちこさなま
独りかわけまいと思ひたるまゝにゝしく世の中のらん
見れとなんはうにおもうぬ事もかのなんふいのぐ

衰乱ナム後ゾナニセン生ルカノタメコソ人ハミニクホシケレ

ヨカラヌ一氏 宇治ノ八宮ヲ春宮ニ立カヘント悪后ノ下ニテ催ナレシ 宇治ノ巻ニテ見エタリ

おかさ給へまよひもなく親王まゝのれに思ひおとさまん
ようあさけまいらせたりとはけにわかぬ人に
いひあまりんをかしとなかりし浅ましはまずそれを
まことに何まいとおぼしへてゆるしけるに給ひて
おほくのこおぼしいはまはさわやいつまでりお
はるにうと乃ゆりもいまして身こくらう乃なきゝう
さうくしけまいらせを院乃の御おきてし給に
思へどようろぬよりどものいそぐくめまいらせんふるし
うちど世をはゞかりの御まつわごうちなし給
人のあるきはなちをつゝ義になまめかしうていかゞ
おしとあかしたる事をおかゝわにはまよはいかで

心つくしの秋風に海はすこしとをけれと行平
中納言のせきふきこゆるといひけんうらなみを
よるよるはけにいとちかくきこえてまたなくあはれなる
物はかかる所の秋なりけり御前にいと人すくなにて
うちやすみわたれるにひとりめをさまして
枕をそはたてて四方のあらしをきき給ふになみ
たたここもとにたちくる心ちして涙おつともおほえぬ
に枕うくはかりになりにけりきんをすこしかきならし
給へるか我なからいとすこうきこゆれはひきさし
給て
恋わひてなくねにまかふ浦波は思ふかたより
風やふくらんとうたひ給へるに人々おとろきて
めてたうおほゆるにしのはれてあいなうおきゐつつ
はなをしのひやかにかみわたすけにいかに思ふらん
我身ひとつによりおやはらからかた時たちはなれかたく
ほとにつけつつ思ふらん家をわかれてかく
まとひあへると思すにいみしくていとかく思ひ
しつむさまを心ほそしと思ふらんとおほせはひるは
なにくれとたはふれことうちのたまひまきらはし
つれつれなるままにいろいろのかみをつきつつてならひ
をし給ひめつらしきさまなるからのあやなとに
さまさまのゑともをかきすさひ給へる屏風

千枝 常則

二人其比ノ上手也 絵工 原ノ墨工ニ 二人ノサイ色ノ工也 只ニ二人ニサイ色工

のおもてどもなどいとめでたくみところあり人々
のかたりきこえし海山のありさまをはるかにおぼしやりし
を御めにちかくてはげにおよばぬいそ
のたゝずまひになくかきあつめ給へりこのころの上手
にすめる千枝つねのりなどをめしてつくりゑを
つかうまつらせばやと心もとながりあへりなつ
かしうめでたき御さまに世のもの思ひわす
れてちかうなれつかうまつるをうれしきことにて
四五人ばかりつとさぶらひける前栽の花さき
みだれおもしろき夕ぐれに海見やらるゝ
廊に出給ひてたゝずみ給ふさまのゆゝしう

白アヤハ一花云 河ニ白キアヤハ衣ニ紫苑色ノ指貫トゝノセラレタリサモアリヌベシ又シヲン色モ同紫衣ノ色ヲ云ンニ相違アルベカラズ キヌトハ色ニシカサネテキル故也 コマヤカナル直衣ハ地ハ平絹ノ無文ニテモ冬ハ紫苑花田年齢ニヨリテ用ル也 花田ナラバ色ノコキツヨニヤカナリト可云

雁陣易迷秋嶺上 息舟難辨夕陽中

きよらなること所からはましてこの世のものとも
みえ給はずしろきあやのなよゝかなるしをん色など
たてまつりてこまやかなる御なほしおびしどけなくうち
みだれ給へる御さまにて釈迦牟尼仏弟子と名
のりてゆるゝかによみ給へるまた世にしらず
きこゆおきよりふねどものうたひのゝしりてこぎ
ゆくなどもきこゆほのかにたゞちいさき鳥の
うかべるとみやらるゝも心ぼそげなるにかりの
つらねてなくこゑかぢのおとにまがへるをうち
ながめ給ひて涙のこぼるゝをかきはらひ給へる
御てつき黒き御ずゞにはえ給へるはふるさとの女恋しき

春聞雁　菅家　後集ニ
我為遷客汝来賓　共是蕭々旅漂身　欹枕思量帰去日　我知何歳汝明春

人々乃心みななくさみにけり
初かりハ恋しき人乃つらなれや旅乃空
とふ声乃かなしきとの給へハ　よしきよ
かきつらね昔乃ことそおもほゆるかりハその
世の友ならねとも　民部大輔
心から常世をすてゝなくかりを雲乃よそにも
おもひけるかな　右近
とこよ出て旅乃空なるかりかねも
つらにおくれぬほとそなくさむ友まと
はしてハいかに侍らましといふ親乃ひたちに
なりてくたりしにもさそはれてまいれる也
けりしたにはおもひくたくへか

めれとほこりかにもてなしてつれなきさましありく
月のいとはなやかにさし出たるにこよひハ
十五夜なりけりとおほし出て殿上の御あそひこひ
しく所々なかめ給ふらむかしとおもひやり給ふにつけ
ても月乃かほのみまもられ給ふ二千里外古人心と
すし給へる例の涙もとゝめられす入道の宮の
きりやへたつるとのたまはせしほといはんかたなく
こひしくおりおりのこと思ひ出給ふによゝとなかれ給
ふ夜ふけ侍ぬときこゆれとなをいり給はす
見るほとそしはしなくさむめくりあはん月の
都ははるかなれともその夜うへのいと

去年今夜侍清涼　秋思詩篇独断腸　恩賜御衣今在此　捧持毎日拝余香　菅家後集

もの物語なとし給ひし御さまの院に似奉り給へりしも恋しく思ひ出きこえ給て恩賜
の御衣はいまこゝにありとすしつゝいり給ぬ御衣は
まことに身をはなたすかたはらにおき給へり
うしとのみひとへに物はおもほえてひたり
みきにもぬるゝ袖かなそのころ大弐はのほる
いかめしくるいひろくむすめかちにてところせ
かりけれは北のかたはふねにてのほる浦つたひにせう
えうしつゝくるにほかよりもおもしろきわたりなれは
心とまるに大将かくておはすときけはあいなく
すいたるわかきむすめたちはふねのうちさへはつかしう

心けさうせらるまして五節の君はつなてひき
すくるもくちをしきにきんのこゑ風につけてはるか
にきこゆるにところのさま人の御ほと物のね
の心ほそさとりあつめ心あるかきりみななきにけり
そちせうそこきこえたりいとはるかなるほとより
まかりのほりてはまついつしかさふらひて都の御
物かたりもとこそ思ひ給へ侍りつれ思ひのほか
にかくておはしましける御やとりをまかりすき
侍るかたしけなくもかなしくも侍るかなあひしりて
侍る人々さるへきこれかれまうてきてあまた侍れは所せき思

あとはるかに海いはねらんなど覚えたわらのちく
きんのかみかまいまほしとのゝ悲人みなかしかへり
み故へ行人なまはいみかりかしいとしと思へどもえ
見る人こゝ此はまいば覚えを思ひてこりしもえなち
やうまうば嶽すかまそ侍せうまとしうわし
人くあひあるすかきのとなわふたるりく
わざとえまわもれしたるすとの語ふ道海わも
さやうよなんかをなくくうへわてかはすよ歸
はわき海うと傳まうちよわけはじめむうんの人こ
まかくしうなぎみちたわみ説ハとうくして
覚えたれ、

イデ松ヲ人ハナトカメソ
大舟ノユタノタユタニ
物思フ比
人ナトカメソ

古今　小野篁
思キヤヒナノ別ニ
ヲトロヘテアマノ縄タキ
イサリセントハ
日本紀　菅丞相ツクシヘ下リ給時駅ノ長
イミジク思ヘルケシキ
ヲミテ作リ玉ヘル
駅長莫驚時
変改一栄一落是春秋
句詩　句詩

野乃言よひさかゝめら所く侍なそなんたゆ
ふみ見るらめや儀くしけも人ゐとうめ
うとやさしよはくゑとて見ぬいとくつうしけるわ、
こ後ありてひ傳ての侍ふのたゆたはずう謎
まやはまのうるなきいさわきんと侍おもはさわ
しもやかるわわむまやのおさりくとらひる
人もさく所をもしておちとまわぬべくなんお思し
く所とやこよは有日すき所まてよえうやをいじ
めたそまつ里そこひ儀とゆ所おわふしあやうわ、
春意いましてつきよおがしいそ侍さるのひてなきさ
折ふをえ人そまつ京侍めのときのして京婦の君い

いやしう数にみえそまほは入道乃宮は是清
事をゆゝしう思ほしいりて大将ものくさは
らん給ぬるをいとしうおかしなげの源清うう
のみこたちむつましうきこえ給しりんすらめ
なとりしめつうるさくふらひきこえ給なとわかさ
給ふる文を清くわかはしそれ小法きて世事よ
のみめて進たまへをおさいのみやきこしめして
いかしくの給ひかねおかや逸のうりしなか人き
んりゆりをて、それ世乃あちりひをふさはす
かうあうはなまおもし給き家者しても世事哉
うしつゑりきそのそれしをなるといひかん人のひが

史記曰趙高欲為乱恐群臣不聴乃先設験持鹿献於二世曰馬也二世笑曰丞相誤耶謂鹿為馬問左右左右或黙或言馬以阿順趙高或言鹿高因陰中諸言鹿者以法 秦始皇本紀

趙高ニ源ヲタトヘテノメニフし

めるやうにはいきうするなど浅事どもおほかめし
くれはまほうりしとそたえてせうそこきこえ給ふ
人なし二條院のひあ君は雅小源まくよおかしなく
さむおわかしおんりしのるいよさなひしひと
ともみんなわすわまいわしりしあいなどりさしも
あるむと思ひしりそみんそてまつわなかなまして
なほうしうおのし花清はうす源まあ春のなほ清ん
りんも思ゐは座わふかう数なまはまうそちるたるし
なへでなるぬきたの人ゝ小法おそれみえなとし給
そこうのなうよはすぐ進さ源清んさしもさとりわ
殿くわ也みるてまほ東うそれ清き源ぬよは悪しき

ましてえんしをこはましうおかし侍へど我身
ずまあさましきすくせとおぼゆるはまぬかれいうて
うれうちぐしてはつかなるむすめを思ひわ侍し
娘どもはにつきてよ侍るのすは侍まゐりわかみ侍へ
志てねしも人死ましをもみなまひなやりし無常
くちにめざめしうらしけなうみづからおぼ
さらしなのいとちかくときくたまるをおききやはま
のきかなくなるむかしおかしわかなはおはしまれは
うし姨乃山は紫といふもの山なれはわれめ
侍らめまぞ

山の井乃いほりよさけかきほしくもこゆるひ

こなたこの里人冬になりて雪ふりわきたるは
空のけしきもあはれすごくながめ侍て琴を引
すさひ侍てしきよみかうこり大補らこ留書
てあそびたまふ時をとゞめて何事なるてなと
ひまなき侍へはまことに胡乃声たいやめて波を乃こえひ
わくまもりし胡地国ありけりしらん女をおかし
やかてましてりのみかくんこの世よ我思ゆる人
などをさやうゆはなち座わすらんするなと思ふも
あらむすれやうありゆかしくて衆の情れ夢と
すゞみ月いとあはうさし入てりのなまぬ猿乃おまし
木いおくまでく侍かし折ての心の世の事ふかきさむも

胡角一聲霜後夢 漢宮萬里月前腸 朝綱
王昭君胡國へ行シトキ

莫登枉芳半
旦国三千世
周一周天廻
玄窓雲将霽
唯是西行不
左迁

こゝいはかうれ月すごくみゆるにたゞ遠あるよ
りなはとひとはぢちおて、
いはかうの雲はりやまもあよひなん月乃
みちらんこともをはし空ひとはぢちおてまぶの
まど侍まれぬ暁のうらふみるいと先ふなく、
ども千るもあるにあく暁いひとわ蘇覚れ
事もあれしみむきたる人もあけまば西とひとり
ごちてあい那へ秋ふうく御てうはまいりて
はまんむをなと志那もめはうしきるのやうよめて
たくみともほえたまんばえみみそまはわ指さ敷よ
あのうさ波小もえ出ざわうわあるしの論いて

スニニテノ七ハ円覚ノ別ニ...

ハイワイ 蔓延 日本紀
ハヒマツハル チ...
ニアリ

いひわさはなどなまばよしきるれ所法かれの道の
むせあ拙思出てふこなど庵わけまど西事もをば
ちて乃へをぞ楽らゐべよるなんはうらゝ西り
あいめんもがなといひけまとうけひのさうむりの
ゆへりあら重てむなしくうんらんうは子も
おこあるを庵しとを侍しいさうていのず世ふ志
らびんたう思へは小園れうちはうあんのゆうりの
こあうはりしこゝまるふすめまどひがめふあう法は
さうふさも思えぞ年月をへくはりしこれきを
かくてれは憐らきてゝ悲りゝうらふやう、
きわつかの史ある乃はりうれ源氏のひゝうる悲しよう

おほやけにはしこまりまてはまのうらうにあ物し
なきあまおこの御すくせにておかえぬ身のあは
なかいよそかゝるついでに此君にたてまつらんや
いふよりはなうこわや京のひとのかたはを遠けば
なんじ物おほめども心もおほくもちなふてうれ
おまわよまきおひく見ゆる乃ためはさへあやまち
なひておくもさはかまきなな人いまさふうくあや
しき山かげをあつなかやめなてんやといふかう
なちてえまわなりし思んあとなかさなんをまかん
はいでしてこまもおりしまきさんとんをなわて
いふもうさくなしなくあそまはゆきまでまゐらむ

行迹

りしばかりは母君ことゝめてたくとも物せりしめ
にはえよはすわてなうさまおはしますらん人をも
思ふらんさでもこゝなをとゞめ給ふべくはこそはゝめ
たゞまてもあはまじき事なわと思ふをいと
いたくつぶ虐儀はえよはたるゝ身はもなうしふも
わがみかせめもかく世よすぐれなましとみも人よ
あとに残ぬふ人のかなしびあはしとなわいのふ物
しなる君ごにはえやは耐いをのがおちよ物し
なまひし播家ふ大納言乃みむすめなわいとよう
げくあるなをとわてゝやけのへりせしなへるま
しにうくわうすぐまでときめりしなる事なるひ

あかはなる雅有人のうへとおほくそう物語りし
うたゝねの哀れとまかなへるいゝはじめてたしかく女は
んをたのしはるかに雲ゐのなかのまかしはぬ中
人なりとておかしすてしなといひぬたはれむきあ
すぐれたるかたちなりねども雅有のあそびのふ
あそびなるをあはれはまなどそかへはむまとなき人に
おとなましうはきるこのはかなきをとゝちおし浅
まれによるひまにてたかき人はやまとなるのうた
ゆもおほさしなとは清き人世をはさらにえし
原などくておりふ人てふをまくれなは清まもなか
なん海のうへにも入なんなどゝ思そふらしきこと

去年ウヘタル櫻ヲ此時分テ木ノ櫻ト云リ

内ノ后ヘ廿二度トアリイカガ仏門ノアリニ朱雀春宮府ノアリニ本

きく思はしつゝて年に二たひ住吉まうで
はせなるわ神乃はちるしなど人まをれたのみ思ひ
なるほゝまゝは年ゝへて日なかくほとしくなる
りうへしはまの桜かのうみさきうめそうの
気色うらしのなるよし後深草乃事おもひし出られて
うちなき給ふおもかうわ二月廿日ほとはいかに
年ゝ京をまかりしけんかまし人々の清あわ
はまなどいはうひしく南都のさくらは盛よなか
ぬらん一年乃花れえんよ院乃御幸し花内れ
また乃いとききよるよな夜めいそわかはゝく来なきと
すてなしも思ひそききえ給

いつとなく大宮人の恋しきにさくらかさし
けふもきにけりといとつましくなるなり大宮の三位
げすなどハ実おりあはて人のうたいとよろしければ
時世はおはしおもくそもれし折ふし宮中先に
あちきなく物のおはせしとかこひしく覚えたまへは
うつり乃世からえありてすみわたりわたるともいつとは
きんとおぼし出てゆはつふまうで給うちあるよは
光ほうしゐまうしきにもひとり涙そこがれゆく
さ夜ねたまへ心さ夜りりんりさなくうちめいたれ
河乃ほまゐはいまふもんやうなるあり行おめ宮垣
志わたしてたの火しる松わりしらせ夜哉をなる物

かくめつらうゆかりし給まかはめきそゆるしさの
きぢちな給ありはをふひ乃うわきぬさしぬ袴うち
やはまでことさらよいなりびもそえし折へ給しも
いうしうえるに恋まれてきよらなわどりはりひ給
へ給でうどもうわうめに志給してたまし服もあり
それ見いまいらせ給ごすぐ法皇のりんでうやうたまの
くなとみ給丹わざよ志あしてもんぞのぐなとみひ
はとめ給りわとみえたれ物まいれるなどことはり
おはりつきをうかわて志あしたれはまともおさわ
しそかい法物もそまいまうをとめしいてく清涼もと
滴ふとしゆ給さ夜力どとり物給ゆ涕まくやもき

在中ハトテモカクテモ日シテ宮モ蒙セモハテシナケレハ

なまめのうれへをやすることなくきこへ侍るも
人のゆく道はおもはしう何かはとなほと申さるよ
見給ふことも侍らぬをさうせ給ひいくたびかあはれと
思へ共御こともちからたてゝ見やはなかなかくるしうか
なまめかしき孫とはいでゝうらめしけれはかうしうみ
給ひけるすゝしきに月にむかひの浦物語なまめ
みわたしける心のすみてるまゝに世をおもひすてゝ
し給ひかなしさをもとのはをそへしけれはきそ
おほしめしけれともかくも給ふさまにおほしきく
たゝはなすべくもあらずは中にかへりしもえま
おほしものもすゝろなるとはまたかへりし給

酔悲泪灑春盃裡 吟苦枝頤暁燭前
右ハ岐ニ左ニ同三月晦日東陽ニテ元稹之ニ別ル

さいひなかりしも枕やすくなほこそいうきよう侍
給ひを中々くなかなか御かへりけまいりて返ひの
かなしみ深うて春の隣のほとりのうちかをるも給
春にすゝみ給ひけるもの人もなかるをなかはなのが
走りはかなる別れしせくのめわ朧月の空に
なはまてわたりあるしめ見え
少将さとをいつまの春か待てこんしう座ま
しきいいう人々かゝる宰相さゝり立いでん
こゝちきて
わかうくかうかのところを右の花のやこは
道やまとりんさらへうよ都の世となとよしあはさは

胡馬嘶北風
越鳥巣南枝
トリハ南ヲコヒ馬ハ胡国ノ獣ハ仍テ北門ニアタレバ旧里ヲシタウテイハフレし
於世人丸
ヨソニアリテ雲井ニミユルイモカ門早クイメラムアユメ黒コマ

にておほし乃君まくらさしけるさきたとくわに
とそくるこゝそてまつはわなかきしりおかげほまぬ
べけれど風にあふれてはいりんぬべけれどなどや
なる世にわかさけなる御るのさ(は)うらさえに
しのび給へとていひ見し寺ふえ乃名あわれなど
ばかり人かるがめはべ事ずいうさみえしなりきと
白やうくさしあがわてものあはたゞしられ
かへる見乃こゝろ出なるに琉見をくわなる氣色みると
中になかいりまきたいめん給いらんとすらんさわ
ともかくてやいとやなりするし
雲ちかくとひしふろも空に見よ我ハ春日の

東ハ大坂西ハ河内
名ヅハシ都ノサカイトニ云し

思フトテイトシモ人ニムツレケンシカナラヒテゾミヌバコヒシキ

朔日ニ己ノ日ノアタルヲ出来タル日ト云

世風記曰三月上巳桃花ノ水下ノ時ニ飲食ヲ為陳招魂請魄拂除不祥云〻

くわなきよまぞかへそえゆれまれなりつかく成めり
人いむりのしらま人ざふりのくしりし世は
みましふ事りさく侍はまいなりよめ飘れさりひ
をまうらんとなん思ひ侍らぬなと乃折ふ宰相
ふ僧すなれ雲井ふひとわきなをそそくつたさ
なまつし友を恋はくかなしけなくふま世をえ侍て
いとしのとくやしう思たまへらるゝわわわかく
などしめやすりもあらでかへわなぬふ名おいとゞ
かなしうなりめくるしなやまひのついたちり
いてきたるものひかふみなんのく初月をするある人ハ
見ゆし折べきことあるゆきのしき人の労くのまは

海つらもゆかしくて出給ふ。いとおろそかに軟障
やうなるものひきめくらして、この国にかよひける
陰陽師めしてはらへせさせ給ふ。ふねにことことしき
人かたのせてなかすをみ給ふにもよそへられて
しらさりし大海のはらになかれきてひと
かたにやはものはかなしき　とてゐ給へるさま
さるはれに出て、いふよしなく見え給ふ。海のおもて
うらうらとなきわたりて、ゆくゑもしらぬに、こしかた
ゆくさきおほしつゝけられて
八百よろつ神もあはれと思ふらんおかせるつみのそれ
となけれはとの給ふに、にはかに風ふき出て空もく

れぬ。みはらへもしはてず、たちさはきたり。ひち
かさ雨とかふりきて、いとあわたゝしけれは、みな
かへり給はんとするに、かさもとりあへず。さる心も
なきに、よろつふきちらし、又なき風なり。波いといかめ
しうたちきて、人々のあしをそらなり。海のおもては
ふすまをはりたらんやうにひかりみちて、神なりひ
らめく。おちかゝる心ちして、からうしてたとり
きて、かゝるめはみすもあるかな、風なとはふくも
けしきつきてこそあれ、あさましうめつらかなりと
まとふに、なほやます、なりみちて、雨のあしあたる
所とほりぬへく、はらめきおつ。かくて世はつきぬる

花云ニス鏡ニ大津皇子サテ其比泊リ吹テノメカシホト云物ヘテイトシソロシシ御伝ニ十源ノ虔訳モエルゾイギタナキ人ハ皆ナヤレニテケリト

日本紀神代巻二彦火々出見尊ニ豊玉姫ト云ヘ明石上ヲ豊玉姫ニ十ズラヘテチルニ

まやとん悩らく思ひまとふにさきそいのと底ゐり
独うちひしてたりけられぬまゝは神すこし寄わ
底して風がらはもやくおほくそ侍る秋のちゞり
なほへしと志りしうくぶるあらい波りひのまゝそ
へぬべのわきわふうの塩とけふ袖になんとわかへば
人うこなん子へとは我けどいとうしはうすえまゝぎ
ちゞはとひあんへ里暁方天から絶やすこたわ君も
いはくの孫いわ竹へまだうみさ夜ともみえぬひと
まそ春とらやまわめしわほよはまいわ我りぬとそ
たどわわりくとえるまおと孫あそさばうえ乃中の
籠玉れいゑいさう輪めでするまれにそみいまたる

住吉ヘ源ノ乳末ノ巻ニ見ヘ又人ヽノ紙ニヤ

なわくわとおかすにゆゑまれむつしうこれ左夜
ぬさんざうくおほりしなわぬ